

その優劣を定むるなどは、今日の宗乘研究として、最も價值あるものと思はれる所である。去りとて又此の方面にのみ没頭して、肝心の自己に求むる實行方面の研究を疎にしては、結局隣の實を數ふるやうなものに成る、されば吾々淨土宗、正流の末徒たるものは、既定正流の信仰に依つて、その修行法は、四修、三種行儀等に於て、實地に研究したきことである、次には信仰の對象に關することも、亦實に正流異流の分るゝ所であるのだから、是れ亦混沌に附して成らぬ、最も研究を要することゝ思ふ。(定)

法照禪師の事蹟及教義並に

中唐代に於ける禪對念佛論

望 月 信 亨

一、法照禪師の事蹟

法照禪師の傳は宋高僧傳第二十一に出てゐるけれども、その中には重もに五台山に入られた時の靈異を記するのみで、其の郷貫出處を始め、從學の師、乃至遷化の年月等に關して何等の記載もない。それゆへ今少し他の材料からそれらの事を調べて見やうと思ふのである。

法照は唐の太曆頃の人で、初め廬山に居り、次で衡山即ち南岳に入つて承遠に師事し、代宗の時に國師となつた人で、餘程その當時に重んぜられた高德である。そのことは柳子厚文集の第六に載せてある承遠の碑文に依つて知ることが出来る。今左にその碑文を擧ぐべし。

南嶽彌陀和尚碑

在代宗時有僧法照爲國師。乃言其師南嶽大長老有異德。天子南嚮而禮焉。度其道不可徵。乃名其居曰般舟道場。用尊其位。居山西南巖石之下。人遺之食。則食。不遺則食土泥。茹草木。其取衣類之。南極海裔。北自幽都。來求厥道。或值之崖谷。羸形垢面。躬負薪樵。以爲僕役。而嫖之乃公也。凡化人立中道。而教之權俾。得以疾至。故示專念。書塗巷。刻谿谷。丕勤誘掖。以援于下。不求而道備。不言而物成。人皆負布帛。斬木石。委之巖戶。不拒不營。祠宇既具。以泊于德宗。申詔褒立。是爲彌陀寺。施之餘。則與餓疾者不尸其功。公始學成都唐公。次資川。誥公。誥公學拾東山。忍公皆有道。至荊州。進學玉泉真公。真公授公以衡山。俾爲教魁。人從而化者以萬計。初法照居廬山。由正定趨安樂國。見蒙惡衣侍佛者。佛告曰。此衡山承遠也。出而求之。肖焉。乃從而學。傳教天下。由公之訓。公爲僧。凡五十六年。其壽九十一。貞元十八年七月十九日。終于寺。葬于寺之南岡。刻石于寺大門之右。

之に依て見ると法照は初め廬山に居た時、定に入て極樂に往き、惡衣を著て佛に侍してゐる者があるのを見て、それは誰であるかとお問ひ申すと、佛はこれは衡山の承遠だと告げられたからして、やがて廬山を出で衡山に登つて、所謂惡衣の承遠を搜がした處が、果して其の人が居たから遂にそれを師として學んだのである。

ところで此の南岳の大長老承遠は、始め成都の唐公に學び、次で資川の詵公に學び、後玉泉の眞公から衡山を譲り受けたとあるが、この中、資川の詵公は即ち智詵といふ人で、禪の五祖東山弘忍の門人である。宗密の圓覺經略疏鈔第四、同大疏鈔第三之下に弘忍の門人十人を擧げてゐるが、その中に此の智詵が列ねてある。又大疏鈔の連文に禪の傍出七家の説を掲げてゐる中、智詵を第二家としてある。又宗密の禪源諸詮集都序上一にも、宗義別當猶將十室、謂江西荷澤、北秀、南侏、牛頭、石頭、保唐、宣什、及稠那、天台等、立宗傳法互相乖阻」と書いてゐるが、この中の南侏は即ち今の智詵を指すのであるから、智詵は五祖門下で別に家を成してゐたことが分かる。成都の唐公といふのは、智詵の弟子處寂俗姓唐承承のことを指したのではないかと思ふ。景德傳燈錄第四、傳法正宗記第九等に五祖弘忍の旁出として資州智詵等の十三人を列ねてゐる中、舒州法照の名がある。是れは今の法照禪師を指したのかも知れぬが、法照を弘忍の門人とすることは

恐らく正しくあるまい。兎に角これに依りて承遠は禪の旁系に學んだことが分かる。これが承遠法照の念佛思想に大なる關係があることで、頗る注意すべき點である。

法照が衡山に移つたのは何年頃か判然はしないが、併し五會法事讚に「梁漢沙門法照太曆元年夏四月中起自南岳彌陀臺般舟道場」とあれば、太曆已前なることは明かである。五台山に入つたのは、宋高僧傳に書いてある通り、太曆五年四月のことで、其の後いろ／＼靈異を感じ、大聖竹林寺を建て般舟念佛の道場を設けて淨業を修せられたことは著名な事實である。

代宗の時國師となつたことは柳子厚文集に出てゐることであるから毫も疑ひはないが、併しそれが何年頃であつたか、知ることが出來ぬ。佛祖統紀の第二十六に、代宗の時、法照を迎へて禁中に入り、宮人をして五會念佛を修せしめたと書いてゐるが、多分その時に國師に任せられたものであらう。

遷化の年月日は明かでない。佛祖統紀には太曆七年に當ると言つてゐるけれども、宋高僧傳に太曆十二年九月法照が文殊の靈相を觀見したことを書いてゐるから、少くとも十二年迄は尙ほ生存してゐたと謂はねばならぬ。慈覺大師の入唐求法巡禮行記第三には、慈覺が唐開成五年(西紀八四〇)五月一日五台山竹林寺に到り、其の寺舎を

巡禮した時の記事が掲げてある。その中に、

齋後巡禮寺舍有般舟道場。曾有法照和尚於此堂修念佛三昧。有勅諡號大悟和尚。遷化來近二年。今造影安置堂裏。

と書いてあるが、開成五年の時、遷化已來二年に近かつたとすれば、即ち開成三四年頃に遷化したことになるけれども、それでは餘まり長壽になり過ぎるのである。何となれば法照は始め廬山に居り、次で衡山に入り、後五台山に移つたのであるから、五台山に移つた時は少くとも五十歳を下るまいと思ふ。然るに五台に入ったのは太暦五年七七〇であるから、開成三四年に遷化せられたとしたら、殆んど百歳の壽を保たねばならぬからである。高楠博士は二年は二十年の寫脱であらうと言はれてゐるが、文章の書振りから見ても遷化後一年や二年でないことは分かる。これに依て果して二年を二十年の寫脱とすれば、法照は元和の終り、長慶の初頃を以て示寂されたもので、又勅によりて大悟和尚と諡されたことを知ることが出来る。

二、法照禪師の著書

法照禪師の著書として今日傳はつてゐるのは五會法事讚一卷のみである。此の書は具に淨土五會念佛略法事儀讚といひ、五會念佛の法事の儀則を明かしたもので、善

導の法事讚、往生禮讚等と先づ同型の書物である。序を合せて總じて四十六の文段があるが、其の中の偈讚は勿論法照自身の作が多いけれども、また彦踪、慧日、淨遐などの讚文も引いてあり、善導の法事讚中の偈讚も載せてある。五會念佛といふのは、無量壽經の清風時發出五音聲微妙宮商自然相和の文に依りて、念佛を五音の曲調に合せて唱へることを教へたものであるが、その第一會は平聲緩念と言うて、先づ平聲に緩つくり南無阿彌陀佛の六字を唱へ、第二會は平上聲に緩念し第三會は非急非緩、第四會は漸急に共に南無阿彌陀佛の六字を唱へ、第五會は轉急念と言つて、高聲に且つ速に阿彌陀佛の四字だけを唱へるのである。法照は此の五會の法を修するものは、此の生に於て能く五濁の煩惱を離れ、五苦を除き、五蓋を斷じ、五趣を截り、五眼を淨め、五根を具し、五力を成し、菩提を得て五解脱を具し、速に能く五分法身を成就することが出来ると言つてゐる。慈覺大師が請來された五台山念佛三昧の法といふのは、多分この五會念佛を傳へたものであらうと思ふ。延寶の頃、忍叡上人は始めて此の法を京都獅谷に修行されたが、その後獅谷五會念佛と稱して今も尙行はれてゐる筈である。

五會法事讚の序文に依て見ると、法照は此の外に五會法事儀三卷を作つて、廣く法事の儀則を述べられたことが書いてある。即ち其の序文に云く、

令依大無量壽經五會念佛。若廣作法事具在五會法事儀三卷。啓讚彌陀觀經廣說由序。問答釋疑並在彼文。亦須具寫尋讀流傳後世。若略作法事即依此文。

これで見ると今の一巻五會法事讚は、略法事の儀則を明かしたもので、廣法事の儀式は三巻五會法事儀の中に具に書かれてあることが分かる。又一巻法事讚は無量壽經に依て五會念佛の法を明かしたもので、三巻法事儀は阿彌陀經及び觀經を啓讚し其の中には廣く法事の由序を説き、又問答釋疑なども施されたことを知ることが出来る。此の三巻五會法事儀に關し、予は嘗てそれを善導の法事讚二巻と般舟讚一巻とを指したもので、即ち善導と法照との著書が混雜したものでは無からうかといふ考を起したことがある。その所以は善導の法事讚は阿彌陀經に依つて法事の儀則を明かし、般舟讚はその標題に依觀經等明般舟三昧行道往生讚とあつて、即ち重もに觀經に依つて般舟三昧行道の法を明かしたものであるから、今の序文に彌陀觀經を啓讚すと言つてゐるのに符合するやうであり、又法事の由序は法事讚にいろく書かれてあり、問答釋疑は般舟讚に載せてあるのみならず、一巻五會法事讚の中に善導の法事讚及び般舟讚の偈文が其の儘引いてあり、編纂の體裁も甚だ善く似てゐる所からして、元と法事讚及び般舟讚は一部三巻の書にして、五會法事儀と題し、法照の作で

あつたものを、後に至て之を二部別行し、善導の作として傳へたものではなからうかと考へたのである。處が法事讚般舟讚の中には五會のことが少しも書いてないから五會法事儀といふ題名に合はぬ。それから又此の二書は承和六年(八三九)靈巖圓行の請來したものであつて、法照の滅後まだ二三十年しか経つてゐない。然るに圓行請來録には明かに此の二書を別部とし、沙門善道集記と題してゐるから、分卷別行並に撰者變改の時日が餘まりに早過ぎる感がある。それで今は前説を取消して、矢張り法照の三卷五會法事儀は已に逸失して傳はらないものと思つてゐる次第である。

又法照に大聖竹林寺記といふ一卷の著書があつたやうである。これは長西録の中にも掲げてあり、又記主良忠上人が此の記を讀んで感激されたことは然阿上人傳に載せてある。文曆の頃、大和生駒山に大聖竹林寺が建つのも、恐らく此の記の影響を受けたのであらう。此の書は多分逸失したものであらうが、その内容は然阿上人傳に引いてある所を見ると、法照が五台山に入つて文殊の靈告を受け、竹林寺を建立するまでの経過を書いたものに相違ない。して見ると宋高僧傳の法照の傳も全く此の記に依つたことが想像されるのである。但し宋傳に法照が五台山の靈異を自ら録したことを書いてゐるけれども、また絳州兵掾王士詹述聖寺記と言つてゐるから、竹林寺記

は或は法照の作ではなくて、王士詹が録したものかも知れぬ。

三、中唐代に於ける禪對念佛論の形勢

法照は前に述べた通り資州智詵の法孫、五祖弘忍の法曾孫に當たる入で、元と禪家に關係がある。然るに禪は五祖弘忍の下で南北兩宗に分かれ、南宗の慧能に對して、北宗の神秀が主として一派を形造り、南宗が唯だ教外別傳の一本鎗で、坐禪見性の外に、經も讀むに及ばぬ、諸善萬行も修するに及ばぬと主張したのに反し、北宗では經も讀み諸善萬行も修せねばならぬといふ説を生じ、中には念佛三昧を以て眞の無上深妙の禪門だと主張するものが現はれて來て、自ら念佛は禪と對抗の形勢を取るやうになつたのである。宗密の圓覺經大疏鈔第三之下に依つて見ると、五祖門下の宣什といふ人は、南山念佛門禪宗といふ一派を唱へたと言つてゐるが、その遣り方に關しては

正授法時、先説法門道理修行意趣、然後令一字念佛。初引聲由念、後漸沒聲、微聲乃至無聲、送佛至意、意念猶麤。又送至心、念念存想、有佛恒在、心中乃至無想、盡得道。

と書いてゐる。兎に角餘程面白い説ではないか。牛頭の法系を受けた南陽の慧忠は、淨土を修行したといふことであり、馬祖の嫡嗣の百丈懷海は百丈清規を作つて、其の中

病僧の爲に彌陀を念じ、茶毘の時には南無西方極樂世界大慈大悲阿彌陀佛と唱へさする様に規則を立てたことは有名なこと、これ等は皆禪が念佛の影響を被つた實例である。

慈愍三藏慧日は天寶七年に寂した人で、六祖慧能より少し後輩であるが、坐禪をやると同時に念佛誦經も修せねばならぬといふことを主張して、禪淨雙修論の急先鋒と見るべき説を唱へてゐる。萬善同歸集の第二に

慈愍三藏云、聖教所說正禪定者制心一處、念念相續、離於昏掉平等持心。若睡眠覆障、即須策勤念佛誦經禮拜行道、講經說法、教化衆生、萬行無廢、所修行業、回向往生西方淨土。若能如是修習禪定者、是佛禪定與聖教合。是衆生眼目、諸佛印可。

と言つてゐるのが即ちそれである。

飛錫は太曆頃の人で、法照と殆んど同時であるが、その著念佛三昧寶王論の中に、念佛三昧を以て無上深妙の禪門であると主張して、理事雙修の説を唱へ、寧ろ有見を起すこと須彌の如くなるも、芥子ばかりも空見を起してはならぬと言つて、無修無行に反對してゐる。飛錫には別に無上深妙禪門傳集法寶といふ一卷の著述があつたことを自身で書いてゐるが、その中には定めて念佛三昧が無上深妙の禪たる譯を委しく

述べてゐるのであらう。

道鏡と善道とが共集した求生西方淨土念佛鏡といふ書物には、念佛對坐禪門の一章を設けて、念佛は坐禪の無生觀門に勝ること百千萬倍なりと論じてゐるが、その中に坐禪は無生無相を觀すものであるから、譬へば空中に樓閣を造らうとするのと同じである。念佛は事理雙修の法であるから、地上に宮室を造ると同様に速にその行を成することが出來ると言つてゐる。是れも亦事理雙修の説で、禪の單理を排したものであることは言を待たぬ。但し此書の作者善道は中唐末頃の人で、善導大師とは元より別人である。

淨土十疑論は天台智者の説と傳へてゐるけれども、實は中唐の初頃の作で（飛錫の寶王論に引いてゐるから其れ以前）、矢張り禪宗に對抗したものであらう。その所以は十疑の中の第二疑に、諸法は體空にして本來無生平等寂滅である、然るに今此の世界を捨て、彼の西方彌陀の淨土に生れんとするのは理に乖くではないかといふ疑に對して、汝は此を捨て、彼れを求むるを理に中らぬといふけれども、同じ筆法で此の世界に住して西方を求めないのは、即ち彼れを捨て、此れに著するのであるから、亦理に中らぬといはねばならぬ。生即無生無生即生の理を知らずに、他人の淨土を求め

るのを贖ふことは、謗法の罪人、邪見の善道であると、頗る強硬に破りてゐる處などが、
どうも禪宗を相手にしたものだと思はれるからである。

要するに中唐已後、南宗禪の盛なりし反動として、北宗を始め、淨土でも天台でも、頻りに理事雙修の説を唱へ、經も讀み、萬善も修行せねばならぬといふことを極力主張したものであるが、併かし其れが爲め念佛の方でも亦その影響を受けて、般舟三昧といふ一種の念佛禪が行はるゝ様になり、所謂禪淨雙修の風が段々流行して來たのである。

四、法照禪師の無上深妙禪門論

法照は飛錫に同じく念佛三昧を以て無上深妙の禪門なりと主張し、禪徒が佛を拜せず文字を立てず、諸善萬行を廢捨するのを非常に攻撃して、自ら音聲語言で佛事を作すべきことを力説せられてゐるのであるが、これは正しく中唐代に於ける念佛一派の輿論を代表した叫びと見ることが出来る。五會法事讚の序文に

念佛三昧は無上深妙禪門矣。以彌陀法王四十八願名號爲佛事、願力度衆生。所以五會聲流於常宮、淨教普霑於沙界。故華嚴經云、三賢乃至一切諸佛無上菩提皆不離念佛念法念僧而生。故法華維摩等經有以音聲語言而作佛事。又聲名句文爲諸教體。豈同今之

學者紫金之容都撥爲有相髻珠之教懸指爲文字、語無色則捨真色、論無聲乃厭梵音。生號無爲。行稱失道、卽顛墜邪山。良可悲矣。今則不然。且金剛般若云、六度萬行一切善法無非佛因。此是釋迦三世諸佛誠諦真言。足以爲信敬。可中依行。

と言ひ、又五會念佛の下に、

念則無念、佛不二門也。聲則無聲、第一義也。故終日念佛、恒順於真性、終日願生、常便於妙理。發心有如此者、必降天魔、擊法鼓、六種震動、四花繁雨、金剛寶座、正覺可期也。故觀經曰、若念佛者、當知此人中分陀利花、名爲希有。觀世音大勢至爲其勝友。當坐道場、生諸佛家。是以如來常於三昧海中、舉綱維、謁乎父王曰、王今坐禪、但當念佛。豈同離念、求乎無念、離生求於無生、離相好求乎法身、離文字、求乎解脫。夫如此者、則住於斷滅見、謗佛毀經、成檀法業、墜無間矣。凡在修道、可不慎毀、可不敬欺。又觀佛三昧海經云、此觀佛三昧是破戒者護、失道者依、煩惱賊中大勇猛將、首楞嚴王百千三昧所出生處。亦名諸三昧母、亦名諸三昧王、亦名諸佛共所印可定。亦名如來禪、非二乘外道等禪。信可知矣。

と書いてある。これは蓋し禪家の學者が念を離れて無念を求め、生を離れて無生を求め、相好を離れて法身を求め、文字を離れて解脫を求めやうとするから、佛も禮せず經も讀まず。遂に謗法の業を成じて無間に墜つる所以であることを指摘し、念卽無念、生

即無生の第一義に達すれば、終日佛を念じても恒に眞性に順じ、終日生を願じても常に妙理に會することが出来る。それが即ち如來禪で、即ち諸佛の共に印可する所の定で、即ち無上深妙の禪門であるといふことを主張したので、慈愍三藏や、飛錫など、全く同一の理事雙修の思想である。

法照が慈愍三藏の説を承けたことは、五會法事讚の中に慈愍三藏の般舟三昧讚を引いてゐることによりて、それを立證することが出来る。飛錫とは殆んど同時代であるから、無上深妙禪門の説は果して孰れが唱道したか、詳にすることが出来ぬ。或は法照の方が飛錫の説に賛同したのかも知れぬと思ふ、承遠の説は分らぬけれども、矢張り理事雙修の立場に居たものと想像される。して見れば法照は此等諸師と同一の考を持つて、南宗禪に對抗して大に音聲語言の佛事を鼓吹されたものと見ることが出来るのである。

印度學序論

——(ウイリアム氏印度教第一章)——

前田 聽 瑞

印度國名の由來

今は昔、中央亞細亞から移住し來つた大アーリヤ(Aryan)民族